

サン＝シモンの社会組織論について

富 岡 勉

目 次

1. はじめに
2. サン＝シモンの社会認識
3. 病める社会
4. 治療法の探求—実証科学的探求
5. 精神（道徳）的靈的勢力
6. 終りに

1. はじめに

空想的社会主義者とマルクス、エンゲルスから呼ばれて以来、ロバートオーエン、フーリエと共にいささかの疑問もなくサン＝シモンは、マルキシズムの自称の科学的社会主義と対比されて今日に至っている。自己の理論と業績を強調する場合、その寄り所に対し負目を感謝するか、逆に寄り所に対し如何にそれが不合理なもので自己がどのように修正し合理的なものにしたかと自己主張する二通りのやり方がある。マルキシズムはサン＝シモンに対し後者の立場をとった。マルキシズムの名句はサン＝シモンに相当負うところがあるようである。エンゲルスは一応サン＝シモンを高く評価しながらも、自己の立場を高揚するために彼を彼方に押しやった。

サン＝シモンの社会理論が全く空想的なのか、全く科学的でないのか、そして称する如くマルキシズムは果して科学的なのか、これは長年月をかけて歴史が証明してくれることではなかろうか。このように言うのは、空想的と批判を浴びたサン＝シモンの理論の如く、約 130 年後の今日、形こそ変わったとは言え、欧州共同体の形成、A・A 諸国の一体化傾向、東欧諸国の団結等が見られ、産業を無視することの不可能な政治が必要となっている現状を目にし耳に聞くからである。一方、科学的社会主義を目標に樹立されたはずのソ連邦とか東独等共産圏においては、侵略皆無の世界が開けているのか、プロレタリアートは真の自由を得ているのだろうか、と疑問を発したくなるような事態もないとはいえないようである。またなぜ、ポーランドで労働者のストライキが発生し、アフガニスタンの根強いゲリラ攻勢があり、ウクライナ地方での不穏な情報も報ぜられているのか？

さてこの小論においては、フランス革命の無政府状態の中を生き抜いたサン＝シモンがアメリカ独立戦争への参加によってアメリカ社会を目にし、それと対比してフランス社会をどう認識したかを考え、フランス革命の本当の終えんを迎えるにはどうすべきか、本来の姿のフランス社会にどうすれば戻せるか、その方法はどうか、その理論の基盤を何処に置いたか、ルターの宗教改

革とどの点で違うのかを探ってゆきたいと思う。

2. サンシーモンの社会認識

サンシーモンは社会を、とりわけフランス社会をどう受け止めていたか、また、社会体制の在り方をどう認識していたか、彼の作品から種々受け取ることが出来よう。彼の全作品を通して見ると、歴史を通して眺めようとしたように思われる。人間の進歩、社会の進歩を歴史を通し科学的に見ようとした。精神（霊）的勢力と地上（世俗）的勢力の弁証法的把握とも、あるいは一般科学と特殊科学の弁証法的把握とも解釈する^{註1} ことも出来よう。また、科学と産業を基盤とした社会の発展段階と見ることも^{註2} 可能であろう。

サンシーモンの社会認識といっても、彼は社会体制の在り方を問題の中心とした認識であって、彼がフランス革命の最中に生きた人間として、また、フランス革命の無政府的状態と恐怖の暴力の中で生きのびたことから、フランス革命のスローガン「自由・平等・博愛」に対し、どう考えていたかということに光を当てることから始めよう。

まず「自由」であるが、これについては彼が『産業者の教理問題』(Catéchisme des industriels, 1824)において強調しているので、これを無視して論ずるわけにはいかないであろう。従って本論においても『教理問答』を取扱うこととしたい。彼は自由を否定したわけではなく、とくに産業者の自由を尊重したけれども「産業主義」に対して「自由主義」を峻厳な態度でもって区別し、産業者が自由主義者に組みしないよう忠告を与えている。自由については彼は当初寛大な態度であった。また、自由主義に対しても深く疑問を感じなかったようである。彼はアメリカ独立戦争にフランス軍将校として参加し、独立戦争そのものには興味を持たなかったが、アメリカ社会がヨーロッパ社会と著しく違っていることを悟った。^{註3} アメリカ新大陸に展開されている生き生きとした新世界が彼の目を引いた。アメリカでは信教が自由であり、封建主義的特権グループもなく、世襲財産は行われず産業的であった。^{註4} そして旧大陸のヨーロッパ人よりも無限の自由^{註5} を満喫しているように見えた。アメリカ人の立法の目的は個人の自由の保証^{註6} であった。このように、サンシーモンの目に焼付けられた自由は尊いものであった。とくに、彼は産業者の自由を望み、産業者の生産物が自由に交換出来る社会と、このように管理出来る政府を願望した。^{註7}

彼がアメリカの自由を観察して『産業論』(L'Industrie) 第二巻の中で、アメリカ人宛の書簡をものにしたのは1817年であった。ところが1820年を過ぎる頃から彼の自由主義者への態度に変化が見えはじめた。

自由主義者と称する者たちは、神学的封建的体制に対する批判的態度は、サンシーモンの産業主義と同調するものであった。というのは、カトリックの網の下にある神学的封建的体制は僧侶・貴族の支配する社会体制であって、産業者は彼らの支配下に服従させられていたが、産業主義はこの封建体制を後退させ、産業者の能力による管理社会への移行を目指していたからである。神権主義的な体制と闘争することにおいては自由主義者の政治的要求と同じであった。しかし、彼は政治上の自由よりも個人の自由を尊重した。それは、個人の自由は如何なる場合といえども、

社会契約の目的ではないとみなしたからに外ならない。自由はこれを「目的」(le but) として要求するものでなく、文化の「結果」(une consequence de la civilisation) とみなした。^{註8} だから、彼は政治上の自由については語ろうとしなかった。^{註9} けれども、自由主義者の政治行動は次第にエスカレートして政治革命へと進みつつあった。そして産業者・産業主義者をも革命に巻き込む虞れが生じてきた。産業主義は革命的でなく平和的である。産業者出身議員の多数が占める国会において産業者が管理者として国政を管理するよう選ばれ、合理的財政を施行することは反革命である。革命の暴力は産業を根底から破壊してしまう。無政府下で無秩序の暴力を振う革命の暴徒は、最初にその破壊力を発揮しやすいのは、普通、産業設備をたたきつぶすことであり、生産品を略奪することであったからである。

そこでサン＝シモンは、産業者の個人の自由を尊重するという立場から、政治的要求としての自由を推進する自由主義、もしくは自由主義者という名称を黙認するわけにはいかない三つの不都合な点を掲げる。その第一は、自由主義は一階級の利益を示さず、これは意識の一つの秩序 (un ordre de sentiments) を示すものである。^{註10} その第二の不都合な点として次のことを掲げる。すなわち、

自由主義者として知られるにまかせている人々の多くは、平和的な人々である。そういう人々の多くは、誠実な合法的な平和的な手段によって、啓蒙と文化の状態に応じた平静で確実な秩序を建てることによって、より一層、革命を終結させたいという願いに元気を与えられる。しかし、この党派の指導者は、18世紀の批判的な、すなわち、革命的な性格を維持して来たのである。初め愛国者 (patriotes) として、それからボナパルト黨員 (bonapartistes) として革命で一つの役割を演じた人たちはみな、今日では自由主義者 (libéraux) だと主張する。こうして、自由主義的 (libéral) と世にうたわれている党派は、今日、違った、むしろ反対の意見さえ持っている二階級の人々から成っている。この党派の創設者は、自分たちが自ら引き継ぐことが出来るようなあらゆる可能性のある政府を打倒することを、その原理の目的としている人たちである。ところが、この同じ党派の大部分の人たちは、国民の利益についてその政府が明確に活動すれば、最も確固とした、最も強力な政府を建設しようとする傾向がある。

その根本的な目的が平和的な手段によって堅実な秩序を構成することである人々にとっては、愛国党とかボナパルト党とかの残党によって選ばれ、とり上げられ、宣言されている自由主義という名称は、最も都合の悪いものである。^{註11}

(・・印は原文ではイタリック部分)

ということである。最後の不都合の点は、政府も国民も自由主義者の政見を採用したいと思わなかったことで明らかである。それは、道を誤り、指導者が悪かったからで、フランスのみならず、ナポリ、スペイン、イギリスで自由主義者が敗北を喫したのもそのためである。^{註12} このようにサ

ン＝シモンは、平静で確固とした事態を愛する平和な人々は、自由主義者に組せず、産業主義者となることを願った。

次に、彼は「平等」についてどういう態度をとったであろうか。彼は絶対的等質性とか経済的平等化とかを社会体制としては考えなかった。それは、彼の思想が社会主義的であって共産主義的でなかったからであるとも言われている。フランス革命の中心であったジャコバン独裁政治は、国家権威の下で無情の平等を求めたけれども、サン＝シモンは人間本来の付与された能力の観点から考えを進めた。人間は本来均質的平等に作られた有機体ではなく、有機的不平等に出来た多様性があり、ルソーの言う如く人間が社会制度を生んだために社会的不平等が生じただけでなく、社会的序列が発生したのは、人間に付与された能力に相違があるためだと考えた。人間は他の人と等質的な平等を望むものではなく、自己の能力を最大限に発揮できることを願望する。従って管理能力のある者、執行能力のある者とそれぞれ別れてくるのは当然であって、ここに社会的序列の発生があるとする。彼は人間の多様性、非類似性、独自性、個別性を認めたわけである。また彼は「平等原則」(principe d'égalité)^{註13} が無知な人の手に権力を握らせたので、全く非現実的な形態が生じ、政府の下で平等ゆえに多くの支配者が出来、支配される者はこの多くの支配者を維持するには不十分だった、と指適する。それは、安い税金を払うことという無産者の、最も動かすことの出来ない願望と全々相反する結果となったからである。^{註14} それゆえ彼は、この人間の能力の最大限に発揮出来る社会体制を望ましい体制とした。そしてそれは産業者の管理する社会だった。産業者は自己の能力に応じて生産を行い、管理能力のある者ほど効果を上げる。従って産業者中の管理能力の優れた者に、産業に最適の社会制度を管理－支配でない－させる社会体制が望ましい、とサン＝シモンは訴えた。

フランス革命の第3の目標「博愛」に対しては彼はどうであったろうか。サン＝シモンは人間を道徳の点から二つのグループに分ける。それは利己主義者と博愛主義者とである。^{註15} つまり、自己の利益を愛する者と他人の利益を愛する者とである。

彼が自己の初期の作品『ゼネバの一住人から同時代の人々への手紙』(Lettres d'un Habitant de Genève a ses contemporains, 1802-3) によって科学の進歩を推進しようとした時以来、彼の心は自己利益中心の側に動いていた。それは、ヒュームとか、アダム・スミス、ベンタム等のイギリスの社会思想家、モラリストの影響を受けていたと見られる。科学の進歩は科学者の利益、知識人の利益、階級の利益というように、自己利益につながるとした。各人の活動を自由に行わせれば各人の利益は調和して行くと考えた。科学者が科学の遂行に邁進し、庶民は兵隊として砲火にさらされないように自己の生命の安全と平和を欲し、財産家は戦争とか革命によって自己の財産を灰じんに帰さないように平和を望めば、それが彼らの名誉、生命、財産等の保全という自己利益につながると考えた。

しかし、1821年頃からの彼の目は他人への愛に注がれ始めた。『産業組織論』に「神は言われた。互に愛し助け合いなさい、と。」(Dieu a dit: Aimez-vous et secourez-vous les uns les autres.)^{註16} と題辞を掲げるに至った。これは個人的利益、階級的利益を超越した人類愛－博愛であ

る。これは彼が影響を受けたベンタムの功利主義の「最大多数の最大幸福」からはじまった。最大多数—最大多数階級—一般庶民階級が最大幸福を得られるようにするにはどうすればよいか。彼はさらに一步前進して、最大多数階級の最大幸福に貢献することへと歩を進める。一般福祉への情熱である。

この博愛的道徳は職業の性格に左右されると彼は見る。普通の人と交る職業では、他人のために働きたいと一層強くなり博愛的になるが、職業が孤立したり金持階級と関わり合いになっていると、自然、利己的になる、と彼は言う。^{註17} 最大多数階級の最大幸福に貢献するには、最大多数階級の欲求を充足することであり、生活を豊かにすることである、と言うのである。そのためには生産を高めることで、これはとりも直さず、産業を高揚することである。産業者の管理する産業主義的社会体制がこれを達成することが出来る。従って、博愛主義者はこのような社会体制となるよう世論を喚起するため、他人を愛し助け合うことを説いて廻る必要がある、とサン—シモンは高らかに主調する。^{註18} つまり、「文化の進歩と全人口の共通の利益と大多数の人たちの切迫した当面の利益とを必要とする社会組織の変化を持たらすよう……言葉ならびに文書の説教を続けるであろう。」^{註19} とする。このように彼は博愛を死に至るまで約5年間訴え続け、この根拠をキリスト教に据えた。それは、初期キリスト教の精神に立帰ることであったからである。

註1. F.Manuel: "The New World of Henri Saint-Simon", Harvard.

註2. Emile Durkheim: "Le Socialisme", Presses Universitaires de France.

註3. Oeuvres de Claude-Henri de Saint-Simon, tome I, L'Industrie, pt. II, p.149.

註4. Oeuvres, tome I, L'Industrie, pt.II, p.150-151.

註5. Oeuvres, tome I, L'Industrie, pt.II, p.151.

註6. Oeuvres, tome I, L'Industrie pt.II, p.151, 152.

註7. Oeuvres, tome I, L'Industrie pt.II, p.166.

註8. Oeuvres, tome III, Du Système Industriel, pt. I, Préface p.15 note au bas.

註9. Oeuvres, tome III, Système, Préface p.16 note au bas.

註10. Oeuvres, tome IV, Catéchisme des Industriels, Deuxieme Appendice p.180.

註11. Oeuvres, tome IV, Catéchisme, p.180-181.

註12. Oeuvres, tome IV, Catéchisme, p.181-182.

註13. Oeuvres, tome I, Lettres d'un Habitant de Genève. a ses Contemporains, p.46.

註14. Oeuvres, tome I, Genève, p.47.

註15. Oeuvres, tome III, Systeme pt.II, 121.

註16. ヨハネによる福音書第13章35

註17. Oeuvres, tome III, Systeme pt. II, p.122.

註18. Oeuvres, tome III, Systeme pt. II, p.123, 124.

註19. Oeuvres, tome III, Systeme pt. II, p.124.

3. 病める社会

自由・平等・博愛という観点から見た場合、サン—シモンは上に記したような見解を持っているが、これからすれば、当時の社会、とくに、フランス社会はどうであったろうか。外観的には

フランス革命が終えんし、ナポレオン・ボナパルトが皇帝に即位して平静に帰りつつあるかに見えた。無為徒食の貴族と墮落し切ったカトリック僧侶が支配権を掌握していた封建的神学的社会が、革命によって後退し、代った革命政府のジャコバン独裁恐怖とその後の無政府状態の連続であった。ナポレオンの出現によって新局面を迎えたかのようにであったが、これも新貴族を生んだにすぎず、ルイ十八世の即位を契機に旧貴族がその勢力の回復を計る機会をねらっているにすぎず、また、革命によって生れた中間階級（ブルジョア）も一般庶民にとっては好ましい存在とは言えなかった。

サン＝シモンの目に封建的神学的時代はどのように写ったろうか。これは、カトリック教を中心として展開される。彼にとってはカトリック教は、徹底的に憎悪の念さえ禁じ得なかったようである。カトリック教が平信徒—とりわけフランス国民の大多教—に平安と幸福を与えることをおろそかにした、と彼は指適する。カトリック教の僧侶は彼らの礼拝・教義・教育・説教・祈りにおいて、人類の大多数が従来よりもより一層満足すべき道徳的物質的状态を享受出来、富める人は貧しい人の幸せを増すことによって、自らの状態を改善するよう、彼らの才能を発揮すべきであった。^{註1}ところが、法王とか枢機卿が承認したカトリック教の教義も祈禱書も、キリスト教の目的を明確に述べず、ただ、神秘的な概念の飽き飽きする繰返し、平信徒の指導どころか、まるっきり正反対に、キリスト教の目的を見失わせるものとなり、神に頼らせることよりも僧侶に頼らせることを目的としている。^{註2}カトリック僧侶にとっては神学は重要な科学であろうから、神学については彼らは力を人れても、一般庶民、つまり、平信徒にはほとんど貢献しない。一般科学に才能を発揮し、これを理解して平信徒よりも優れた知識をもって指導すべきであるにかかわらず、社会を改善し福祉を増進する科学については平信徒よりも劣った能力と知識しか持ち合さない。^{註3}

一方、このようなカトリック僧侶と固く結びついた貴族はどうであったか。フランク人の貴族は土地を領有しゴート人を支配した。領地からの年貢、国家的名誉と権利と地位とによる税金からの収入などによって無為徒食の日々を送っていた。その無りようを慰めるため仲間とのかけ事の日課であり、勝負するからには勝ちたいのが人間の心理であるから、彼らは勝利の確率をお抱え数学者に研究させた。日常の事柄は執事がすべてとり行う上、領地内での粉争とその判決は足下のお抱え法律家が裁いてくれる。はなはだしきは、自分の名さえ十分書けない貴族もいたといわれている。^{註4}

このような無能力なカトリック僧侶と無為徒食の貴族とが結託して支配権を握り、また、彼らの無能と無知識に乗じてのし上った法律家、及び平民出身の新しい土地所有者などは中間階級（ブルジョア）として抬頭し、フランク人の子孫の主権を追い払うために立上るよう大衆を扇動した。これによって、中間階級は第一階級となり、自己の利益のために新貴族を選んで、世襲財産を設けて再び封建制を再建した。^{註5}

このように、サン＝シモンの目には世の中が逆立ちしているように見えた。能力があり知識ある者が被支配階級として働かされ、能力なく無知識の者が世襲なるがゆえに支配権を握っている

のである。すなわち、才能を生かして生産にたづさわっていない財産所有者ばかりでなく、僧侶、貴族、及び、法的命令によってこれまで実際に行われていた支配から、最も実証的で最も直接的に役に立つ仕事にたづさわっている人々は、解放されていなかったのである。^{註6} まさに、フランス社会は病める社会であった。

註1. Oeuvres, tome III, pt. III, Nouveau Christianisme, p.122-124.

註2. Oeuvres, tome III, pt. III, N. C. p.124.

註3. Oeuvres, tome III, pt. III, N. C. p.124-127.

註4. Oeuvres, tome IV, Catéchisme, p.35.

註5. Oeuvres, tome IV, Catéchisme, p.39.

註6. Oeuvres, tome III, pt. I, Système, p.158.

4. 治療法の探求—実証科学的探求

すでに記したように、サン＝シモンの目にはフランス社会は病んでいると写った。それで彼は、この病をいやさなければならないと考えた。彼は人体の病をいやすために医者が行う治療法と同じやり方を社会の病にも適用したいと思った。それは、彼は社会も人体と同じく有機体組織であるとみなしたからに外ならない。医者の治療法は空想的では勤まらない。実証に基いた経験と推理によらねばならない。それは科学的である。

医者は病気診断に当ってはこれまでどうであったか、何を摂取したか、体質はどうか、過去の病歴はどうか、現在の症状はどうか、痛みはどこらか、そこが患部か、などと詳細にわたって問診、検診などを行って調査する。そして過去の経験、臨床例などと照合して診断を下し治療に入る。サン＝シモンも社会の患部を探り出すべく、過去の社会の体質・症状を調査するため歴史的解明から入って行った。人間精神の進歩追求からはじまる。社会の病気についての診断は彼以前には余り行われていず、未経験の領域が多かったと言える。従って試行錯誤を重ねなければならないであろう。この点でサン＝シモンは、彼の思想原理が支離滅裂かのごとくしばしば言われているが、そうではなかったように思われる。前人未踏の領域に入り、新たな道を開拓するため、彼の論述が行きつ戻りつしたり、前後につじつまが合わなかったり、先の理論と後の理論に矛盾があるように思えたり、試行錯誤したことが誤解を招いたのではなかろうか。実証科学の実験についても、推理推論の上に立って実験を行っても、必ずしも一度で成功的な結果を得るとは限らないであろう。失敗と成功の繰返しは科学実験においてはいくらでもあることであろう。この容認なくして、支離滅裂と評することは酷と言うべきではなかろうか。サン＝シモンは科学と人間精神の進歩の歴史的追求を行った。これは『ゼネバの一住人から同時代の人々への手紙』からはじまる。ここでまず、神学的封建的社会制度の絆から脱却して、科学に目を向けさせようとする。その科学とは自然科学は言うまでもなく、道徳、政治、宗教、法律などをも含んだ思想そのものであった。これは、カトリック教を中心とする神学的情熱に対する実証科学的理性の挑戦であった。なぜ、サン＝シモンは挑戦したか。つまり、人間精神の進歩の過程から見て、神学的封建的

社会制度は、社会を唯一の法則によって導こうとしたと見るサン＝シモンにとっては、キリスト教という唯一の法則を大きく横道にそらせたとみたからに外ならない。これが社会の病根だった。カトリック教皇と僧侶たちは、キリストの名のもとに彼らの唯一の科学－神学－をもって、信徒たち、つまり、人類を指導したのである。

彼は科学的研究を事実の探求 (chercher des faits) と事実に基く推論 (raisonner sur les faits) との二つに分けた。^{註1} これは単なる憶測を示すものではない。そして17世紀の科学的研究の観察から18世紀を径て19世紀の初頭に至る。もっともその内容は12世紀頃からのものが含まれ、天文学のみならず、人間精神の発達を中心として、一般思想、宗教、道徳、感覚、歴史などに及ぶ。そして理性の代表者として科学者をとり上げ、神学という社会の病源に対する治療の第一段階に取りかかった。とくに、数学者、物理学者を主な治療薬とみなし、万有引力を強力な手段とした。これがために、ニュートン教という名さえ生まれた。

サン＝シモンは、医学が肉体的疾病を治すために力を貸すのと同じやり方で、人間科学は道徳的悪を根絶するために用いることが出来ると判断して、^{註2} この病める社会、とくにフランス社会の病根を根絶したいと望んだわけである。彼は社会の発展過程を歴史的に観察することによって、自然界に法則があるごとく、社会の進歩発展にも法則があろうと推論し、この法則を発見出来れば、これにのっとっていない社会状態ならば、なにか社会の順当な在り方を阻害しているものがあるに相違ないと結論するに至った。阻害しているものが何物であるかが分れば、これを除去する方法手段も自ら分ってこよう。そうすれば社会は正当な姿に戻せるであろう。このような推理から、彼は、人間精神の進歩を宇宙現象から太陽現象へ、そしてさらに、地上現象へと説き及び、この研究から社会組織の法則を引き出そうとした。

宇宙は単一不変の法則 (une seule loi immuable) の管理下にあるという信念を、むしろ信仰に近いものを、人間は抱いている。社会の認識もこれに基くならば、単一不変の法則に基く社会体系と矛盾があってはおかしい^{註3} ということである。宇宙の単一不変の法則が万有引力であるならば社会の単一不変の法則は何か。これを彼はキリスト教とその道徳としたのである。彼は社会のリーダーとして、まず、万有引力の研究の中心的存在である科学者、とりわけ数学者、物理学者を第一人者とみなした。しかし、彼らはサン＝シモンの期待を裏切った。彼らの働きは人類社会の平和と進歩に役立つことよりも、武器の生産に力を貸し、戦争に荷担して人間を不幸に落とし入れたからである。このように歴史を通し実証的に社会の病根を尋ね当て、それをカトリックの支配する神学的封建的社会制度と診断し、これを駆除する薬として用いた数学者・物理学者では副作用の方が大きすぎたという結論に達した。もっとも、これによって科学者を全く排除したというのではなく、別の投薬を試みることにしたのである。

能力がありながらその能力が評価されず、社会の被支配層として働かされ税金を納めさせられているにもかかわらず、一方で能力もないのに、世襲的に支配者層となって、納められた税金から収入を得て無為徒食する人たちのいる社会が正常でないとするならば、能力が正しく評価され、有能者こそが社会のリーダーとして管理をゆだねられ、無能力で無為徒食の人たちが支配権を把

握出来ず、退けられる正常な社会組織実現を目指さねばならない。サン＝シモンはそのリーダーを数学者・物理学者に求めたのだが期待外れであった。それでは誰が一体社会を正常化することが出来るのか。彼はこれを産業者に求めることとなった。

註1. Oeuvres, tome VI, Introduction aux travaux scientifiques du XIX^e siècle, tome I, p.14.

註2. F. Manuel: New World, chap. 13, p.158.

註3. Oeuvres, tome XI, Memore sur la science de L'homme, p.173.

5. 精神（道德）的靈的勢力

社会の管理をゆだねるべき者として産業者を選んだところに、社会の唯一不変の法則とのかかわりが見られよう。人間精神の発展過程の歴史的追求によって、人間が偶像礼拝とか多神教の過程を経て、唯一の神信仰へと到達したことを究め、現在の社会は、唯一の神信仰のキリスト教によって道徳的に管理されねばならないとした。そしてキリスト教の根本精神は、自分を愛するように他人をも愛する博愛と見たのである。したがって、サン＝シモンの最後の論文となった『新キリスト教』の題辞にも、すでに記した『産業組織論』の題辞と同じものが用いられ、この精神は、彼に言わせれば、初期キリスト教時代は忠実に守られ、僧侶もこれを大切に遵守した。この時代は、僧侶は平信徒よりも知識において、能力において優っていて、平信徒を指導する才能を十分持ち合せていた。ところが15世紀以後になると、法王庁は次第にこの精神から離脱し、平信徒たちが科学的知識を目覚ましく吸収し、その応用と実用化を計っている時に、僧侶たちは一般科学と特殊科学を省みることもなく、反ってこれら諸科学を邪悪視して神秘的な教義をなおも平信徒に押しつけ、依然として平信徒からの収奪を続けた。も早や、僧侶たちは科学的知識においては平信徒に対抗すら出来ず、一般知識においても指導の才能すら発揮出来なかった。にもかかわらず、教皇と僧侶に仕えることがとりもなおさず神に仕えることであると、依然として教えていることは時代錯誤というべきであった。も早や、教皇も僧侶たちも、平信徒の幸福を全くもたらしことの出来る存在ではなかった。

では、もう一度キリスト教の根本精神に立ち返って、自分を愛するように他人を愛し、互に助け合える人は誰かを問おう。サン＝シモンは『新キリスト教』の中で言う。「神は必然的にすべてのものをたった一つの原理にまとめられた。そして、その原理から必然的にすべてのものを推論された。そうでなければ、人間に対する神の御意志は体系的でなかったであろう。」と。註1つまり、サン＝シモンは神の支配によって全宇宙は一つの原理によってまとめられ、自然界においては万有引力として、人間社会においては、他人を兄弟の如く助けるというキリスト教道徳によって現わされているというのである。これをデュルケムは一つの原理を持込むためにキリスト教を利用せざるを得なかったかのように批判する。註2 それはともあれ、キリスト教道徳にのっとなって他人を助け幸福に出来る人は誰かと求めた。そして、この人たちこそ産業者と見たのである。ではなぜか。

ここでサン＝シモンは、他人を兄弟の如く助け合うことを拡大していく。^{註3} 他人を愛し助け合うことは、他人の望んでいることを満たしてやることである。この他人は複数である。しかも、フランス社会の複数の他人とは最大多数階級の人たちである。最大多数階級の人たちの最も望んでいることとは何であろうか。それは幸福であろう。ここで彼はベンタムの功利論の適用を計った。その幸福とは「貧しい階級の道徳的物質的状态を出来るだけ早く改善すること」^{註4}であった。なぜか。フランスにおいて物質的に豊かに生活出来る階級は無為徒食の貴族と僧侶で、一般庶民は、最大多数階級の貧しい暮らしを強いられていたからである。

すでに触れたが、もう一度『新キリスト教』を通して、サン＝シモンがカトリック教は最大多数階級の人たちの隣人となり得ない、といったことを省みたい。その第一は、カトリック教の僧侶たちが平信徒に与える教育がキリスト教の精神にのっとなって指導していない、ということであった。^{註5} つまり、僧侶たちは、その礼拝、教義、信徒への教育、説教、祈禱において、貧しい人たちの道徳的物質的状态を出来るだけ早く改善することが地上の目的であると訴えていないことだった。そしてひたすら、礼拝、教義の各原理において、平信徒に、僧侶たちに絶対に頼らせることだけを訴えた。^{註6} その第二は、信者を導くのに適した知識をカトリック教僧侶たちは欠いていたことであった。^{註7} 僧侶たちは神学校において彼らの大切な科学として神学を学ぶ。しかし、その神学は貧しい階級の福祉増進の助けとはなっていなかった。というのは、15世紀までの僧侶は、すべての科学において平信徒より優れていたが、レオ10世の法王即位以来、科学の知識において平信徒より劣って来たからである。平信徒はこの科学的な知識とその応用によって産業能力を高め生産を増大し、物質的生活を豊かにするよう努力して来た。^{註8} にもかかわらず、法王と僧侶たちはこの点において全く努力をしていないから、キリスト教精神に違反している、というのである。その第三は、平信徒である君主たちの統治よりも劣っているから、平信徒たちを幸福にすることが出来ていない。というのである。^{註9} 法王統治下の寺領は荒れて疾病の発生する沼地となり、耕作されず放置されている。その統治下では法王がすべてのものに独占権を持っているので、法王はお気に入りの枢機卿に独占権行使をまかせるから、才能不足のため管理が拙劣で、各産業部門は麻痺状態であった。従って失業も多く生活が苦しい。そして寺院の慈悲によってわずかの食糧しか与えられないので栄養も不十分だった。寺領下の信徒の物質生活は誠に哀れなものであった。最後は、カトリック法王が宗教裁判とイエズス会（ジェスイット派）の二制度を設置したことである。^{註10} キリスト教精神は本来温和で善良で慈悲深く誠実で、信仰と証（あかし）が武器であった。ところが宗教裁判の精神は専制とどん欲で、その武器は暴力と残忍とであった。また、イエズス会は、利己主義で計略によってその目的を達しようとして努力している。そしてその目的とは、聖職者と平信徒の両者の上に一般的な支配を行使することであった。^{註11}

このようにカトリック教が最大多数階級の人たちの最大幸福をもたらすことが出来ないならば、カトリック教を正すために抗議したルターが唱えたプロテスタンティズムはそれが出来たのだろうか。これに対してもサン＝シモンの答は否定的である。これについては彼は三つの点をあげる。サン＝シモンは一応ルターの宗教改革を正しかったと評価しながらも不完全であるとした。その

第一は、貧しい人の状態を改善するよい方法で人類を組織化する使命をイエスは弟子たちに与え、柔和、信仰、証（あかし）以外の方法を用いないことを教会に求めたにもかかわらず、ルターはこの任務のどの部分にとりかかったのかと疑問を発している。^{註12} ルターはこの任務のためにキリスト教を再組織せず、キリスト教の社会的重要性を増すに必要な手段をとる代りに、キリスト教を出発点まで逆行させたとしている。^{註13} その第二は、ルターは改革された教会の礼拝を説教に変えただけで、^{註14} キリスト者の感情を殺風景（prosaïque）なものにした。キリスト教は絵画・彫刻・建築・音楽等あらゆるものを駆使して信徒の魂を揺り動かして喜びに満ち、一方、神に背を向ければ如何に恐るべきものであるかを、肉眼によっても見ることの出来るようにすることによって、キリスト教道徳に信徒の関心を引きつけるべきであったにもかかわらず、ルターはそのようなことをしなかった。教会の美的表現、礼拝の音楽的優雅さと荘重さを取り除き、説教中心の無味乾燥なものにし、信徒の宗教的・道徳的感情を潤いのないものにしたというのである。その第三は、聖書研究を強調したことである。^{註15} ルターはラテン語で書かれた聖書は、ラテン語の知識を与えられた僧侶しか読めないが、万人祭司としてキリスト教を信徒に知らせるには、一般信徒も聖書を読むことが出来るようにとドイツ語に翻訳した。そして聖職者以外の信徒も聖書を研究出来るようにした。しかし、それがために、初期キリスト教時代とは比較にならない程文化的に科学的に進歩した現状では、聖書重視のあまり実証的なことが軽視され、また、神の前では人間はすべて平等であるということから、与えられたそれぞれの能力を無視した等質的平等を主調する不合理も生んだ、というのである。

このようにして、カトリック教もプロテスタンティズムも、神の精神に基いた人類社会の組織化が出来ず、最大多数階級の最大幸福をもたらすことが不可能とすれば、一体、誰がそれをなし得るのか。そこで、最良の薬と治療手段を見出したのであるから、神の意志に添った社会を組織化するため、投薬し治療に当るべきである、とサン・シモンは訴えるのである。これが『新キリスト教』であった。彼はこれを自分の希望通り完成することなく1825年5月19日午後10時この世を去った。完成することなくと述べたのは、『新キリスト教』を二部に分けたある程度の分量のものにしたかったのであるが、胃腸炎の大病を病った時、死を予期してか内容を割愛して短かくしたようである。『新キリスト教』は彼の死の直前1825年に出版された。

したがって、『新キリスト教』の内容は、彼が1802～3年に『ゼネバの一住人から同時代の人々への手紙』を著して以来の諸作品を結論的に集大成したものとなっている。また、『新キリスト教』は、これより以前に書かれた『産業者の教理問答』で取り入れている対話形式を、同じように取り入れ、保守主義者（le conservateur）と革新主義者（le novateur）との対話が交わされ、保守主義者が革新主義者に説得されて、次第にサン・シモンの理論に同化されていく形態をとっている。これは恐らくプラトンに学んだのではないだろうか。

彼は『新キリスト教』において、最大多数階級の精神的・道徳的状态を出来るだけ迅速に完全に改善することが神の永遠の命（la vie éternité）を得ることになり、これは産業を中心とした社会の組織だった。しかもこの産業は、科学を重視しこれを利用したもので、科学・芸術との協調

の上になつたものであった。産業の重視は生産の高揚につながり、生産の高揚は物質生活の豊かさに結びついていく。そして産業者中心の社会が組織化され、産業中心の社会制度が行われることである。これは、社会が産業者の管理の下ではじめて円滑に行われる。産業者が議会において多数を占め、その中から管理能力のある者が支配者でなく社会の管理者として選ばれる制度である。何故かと言えば、産業者は金の使い方を知っているから、自分たちの納めた税金を無駄使いしないからである。税金の使い方についても有効に行使する筈である。無駄使いをすれば自己経営の産業を破滅に導くことを熟知しているから、税金も社会発展のために効果ある使い方をするであろう。従って、産業者の管理する社会制度を最も望ましい在り方とした。

サン＝シモンがキリスト教の立場を一貫して堅持していたことは、『ゼネバの一住人から同時代の人々への手紙』以来その内容を見てくれば明らかであるが、これは、彼が単一の法則によって社会も管理されていると見たからに外ならず、社会を弁証法的に発展しているという見方と軌を一にしたからであろう。社会は、霊的勢力の支配していた社会から地上（世俗）勢力の優位な社会へと発展したが、次に到来すべき社会は、この両勢力が止揚され、両勢力が共存しつつ霊的勢力の優位な社会でなければならないと考えたのである。初期キリスト教時代は、最大多数階級の幸福をひたすら地上においても実現しようと僧侶たちも努力し、政治にもその影響の強い時代であった。しかし、15世紀以降、カイザルのものはカイザルに返されてカイザルが地上勢力を強化すると共に、ローマ法王庁が地上勢力に権力を売ってからは、地上勢力優位の時代が続いた。けれども、来るべき望ましい社会、再建されるべきフランス社会は、地上勢力に多大の影響力を与える霊的優位の社会でなければならないとサン＝シモンは言うのである。しかも、それを彼は社会の科学として求めた。

サン＝シモンが社会の科学として求めたものは何であつたらうか。それは道徳だった。「ことに前世紀（18世紀一筆者挿入）の初め以後、数学において、物理学において、化学において、生理学において、著しい発達がなし遂げられた。しかし、物理学とか数学の知識よりも社会にとってさらに重要な一つの科学がある。すなわち、それは社会を構成する科学、社会の基礎となる科学である。つまり、それは道徳である。さて、道徳は物理学とか数学の道とは全く反対の道を歩んで来た。その根本原理が生れたのは1800年も前で、その時期以来、キリスト教の創始者によってその時与えられた原理以上には、いかに偉大な天才たちのすべての探求も、その一般性において、また、その正確さにおいて、より優れた原理を発見することは出来なかった。」^{註16}そしてこの道徳は、彼にとっては霊的勢力と地上勢力との接点であつた。その理由は何か。

人間は本来自己中心的との見解もある。サン＝シモンはすでに記したように利己主義を中心とした考えから、他者を愛することなくしてキリスト教の根本原理に添うことが不可能であると博愛主義を唱えるに至った。これは根本的同一性（l'identité fondamentale）、つまり、単一の法則支配を主張する以上、他者をも自己同様愛し助け合わねば世界は一つにならないからである。自分を愛するように他の人々をも愛し助け合うことは個人の内的側面である。一方、産業者が生産性を高揚し、物質を豊かに流通させることは社会の利益性と共に集团的側面である。前者は霊的

であり後者は地上（世俗）的である。互に兄弟の如く愛し助け合うことは神に近く、最大多数階級の生活改善は神からは前者より遠い。個人的内面的側面と集団的社会的側面とである。この両者をどう結びつけるか、個人の救いを最大多数階級の救いにどう結びつけるか、ということである。しかも、サン＝シモンは靈的なものを前面に据えつつ、現世的な科学をも忘れずに止揚しようとしたのである。これを社会の科学として求めたのがキリスト教の道德だったと言えるのではなかろうか。これはまた、今日のキリスト者への信仰と実践に対する示唆にも富んでいると言えるのではないだろうか。

註1. Oeuvres, tome III, N. C., p.108

註2. Durkheim: Socialisme, p.228-230

註3. Oeuvres, N. C., p.109

註4. Oeuvres, N. C., p.109

註5. Oeuvres, N. C., p.121

註6. Oeuvres, N. C., p.124

註7. Oeuvres, N. C., p.125

註8. Oeuvres, N. C., p.126

註9. Oeuvres, N. C., p.127-129

註10. Oeuvres, N. C., p.129

註11. Oeuvres, N. C., p.129-132

註12. Oeuvres, N. C., p.142-143

註13. Oeuvres, N. C., p.158

註14. Oeuvres, N. C., p.162

註15. Oeuvres, N. C., p.168

註16. Oeuvres, N. C., p.187

6. 終りに

以上のように観察して分るように、サン＝シモンはすでに1802～3年の作品において、神の哲学の体系化註を考えていたわけである。そしてこれは、彼の作品を通して明確に貫き通されているものである。その神は唯一の神、キリスト教の神であった。

信仰による救いは信仰者一人一人、個々の魂の救いである。しかし、社会という共同体における救いは、この個々の救いを単に数学的に集合した結果のものであってよいのだろうか。社会全体がトータルに救われる道はあり得ないのだろうか。これをキリスト者がもたらすには及ばないのか、などと問題にしてみてもよいのでないかと思われる。人間共同体にあって、ひたすら召命観に徹して自己の任務に忠実であるだけで十分なのか、巨大化した人間共同体の中で貧しい者の隣人となるには、個々の働きかけだけで十分なのか、愛の実践よりも只管神の言葉を聞くこと、礼拝すること、聖書を読むことだけが大切なのか、と疑問を抱き、サン＝シモンはカイザルのものはカイザルに返した社会にあって、個人としての魂の救いに預りながら、共同体として地上において神の救いに預る社会組織化を試みようとしたわけであろう。しかし、残念ながら、カトリ

ック教からは敵視の眼を向けられ、プロテスタンティズムからは彼の理論をキリスト教道徳論と軽視され、マルキシズムからは空想的社会主義と軽べつ的にきめつけられてしまった。

この問題は19世紀のサン＝シモン時代の問題として取り残しておいてよいのであろうか。今日のキリスト者にはこの問題はもはや不要であろうか。賀川豊彦の働きはどうであったか。河上丈太郎はどうだったか。戦前の杉山元治郎は代議士として戦争にどう臨んだか。キリスト者としての片山潜、鈴木文治、安部磯雄、石田六次郎、村井知至、石川三四郎、木下尚江、河上清、西川光二郎など、多くの人の行動と信仰を省み再考することもまた、われわれの歩み方のしるべの一つとはならないだろうか。

註. Oeuvres de Saint-Simon et d'Enfantin, tomé I, "Notice Historique" p.49.